

『長生殿』 訳注（十一）

竹村，則行
九州大学大学院人文科学研究院文学部門：教授：中国文学

<https://doi.org/10.15017/4980>

出版情報：文學研究. 102, pp.89-104, 2005-03-31. 九州大学大学院人文科学研究院
バージョン：
権利関係：

『長生殿』 訳注 (十一)

竹 村 則 行

凡 例

- 一 『長生殿』本文の底本には、現在最も流布している徐朔方氏の校注本を用いたが、厳密な校訂を施した呉梅校本（劉世珩『彙刻伝劇』所収）を始め、次の第二項に掲げる諸書も随時参照した。
- 二 本訳注に当たり、出典の確認や本文の解釈等に以下の諸書を随時参照したが、訳注の際にはこれを一々明示していない。
塩谷温『国訳長生殿』（『国訳漢文大成』所収、一九二三年）
徐朔方校注『長生殿』（人民文学出版社、一九五八年）
曾永義『中国古典戲劇選注』所収『長生殿』（国家出版社、一九七四年）
蔡運長『長生殿通俗注釈』（雲南人民出版社、一九八七年）
岩城秀夫『長生殿』（平凡社東洋文庫、二〇〇四年）
- 三 本訳注では、主に前記参考書に於いてなお未注の故事出拠等について注出する事にした。全般的総合的な注については、康保成・竹村則行『長生殿箋注』（中州古籍出版社、一九九九年）を参照されたい。
- 四 【曲牌名】に続く「唱」部分の訳出は、時にこの間に挟まれる短い科白や襯字をも含めて、【ゴチック文字】の体裁で示した。また、演員の扮装や動作、および唱や動作の主体を示すト書きの部分は、底本の通りに小字で示した。
- 五 訳語のうち、原文の「介」「科」（しぐさ）は、一種の術語として、そのまま「介」「科」として訳出した。

六 訳文は、『ゴチック文字』で示した「唱」部分の訳出を含め、莊重な韻文の形式を採らず、意味内容の解釈を重視しつつ、努めて平易な日本文となるように留意した。(「唱」部分の韻文訳出は今後の課題である。) それでも、訳者の誤解や力量不足による生硬な訳文を免れなかったかも知れない。諸先生の忌憚無い御指教をお願いする次第である。

七 前稿『長生殿』訳注(二〇三、六〇十)は『中国文学論集』二十六〇三十三号(九州大学中国文学会、一九九七〇〇四年)に訳載し、また、同(四・五)は『文学研究』九十七〇八(九州大学文学部、二〇〇〇〇一年)に訳載した。八 本訳注(十一)(第三十九〇四十二齣)は、二〇〇三年十一月〇四年六月に行われた九州大学大学院での『長生殿』演習資料を基にして、竹村が新たに浄書した。この間の演習に参加した院生は次の通りである。

土屋 聡 ・ 有木 大輔 ・ 陣内 孝文
陳 獅 ・ 赤嶺 明乃 ・ 大淵 貴之

第三十九齣 私 祭

〔南呂引子〕〔小女冠子〕(老旦と貼が女道士に扮して共に登場する)(老旦) 私たちはかつての宮廷風の黒髪を切り、(貼) 古びた道観に身を寄せて共に香を焚いている。(合) 昨夜来の雨風で花が散ったこと^①を嘆きつつ、心新たに丹念に『道蔵』をひもときます。

〔老旦〕 静寂な道観は竹垣に囲まれ、(貼) 泉水がさらさらと音を立てて流れる。(老旦) 道観に寄進した踊りの衣装から残り香が漂う中、(貼) 我らは毎日供花の前で読経につとめている。(老旦) 私は天寶朝の旧宮女の永新です。難を逃れて念奴さんと宮殿から脱出し、まっすぐ南京にやって来て、この女道観の女道士になりました。何はともあれ、ここはとても静かで、存分に修行ができます。この観主様は、先日長安から『道蔵』を購入して帰られました。今日は晴天なので、我ら二人に『道蔵』の点検と虫干しをさせます。まずは丹念に經典

をめぐってみましょう。(舞台上に予め経典を置く机を設置し、老旦と貼が共に書物をめくる介をする)

【双調
過曲】**【孝南枝】**【**孝順歌**】本箱を開け、『道蔵』を机上に並べ、日長の春風にさらして丁寧^①に虫干しする。見れば、陽光の中に香塵が舞い、空から天花が降ってきたかのよう。(老旦) 思えば昔、宮中で貴妃様が白鸚哥に『般若心経』を暗誦するよう調教しているのを聞きました。もし貴妃様がもつと早く道教を修行していたなら、馬嵬の悲劇を免れたのでは。(貼) 天宝の熱狂時に、どうしてそんなことを思いつきましよう。(老旦) それもそうね。昨日、観主様の話では、馬嵬坡の居酒屋が貴妃様の錦の足袋を手に入れ、更にそれを観客が銭を払ってでも見たがるそうな。貴妃様の生前であれば尚更でしょうよ。(合) 貴妃様が白鸚哥の雪衣女に『般若心経』を朗誦させたことも、今は空しいこととなった。今回の事件では色欲にとらわれて空理を覚ることがなかったが、一体誰がその道理を諦観できましよう。^② **【鎖南枝】**貴妃の錦の足袋の残り香が、今もなお見に行く人の心を動かすことになろうとは。(雑が女道士に扮し、お茶を持って登場) 『道蔵』を目下に曝書するお二人に、「雨前」の銘茶を煎れました。^③ お二人とも、『道蔵』の点検にお疲れでしょう。観主様のお心付けで、ここにお茶をお持ちしました。(老旦、貼) それはご苦労様。(お茶を飲む介をする)(雑) あらっ、黒雲が出てきて、雨が降りそうですわ。(老旦、貼) 早く書物をしまいましよう。(片づける介をする)(雑) ほら、鶯が乱れ飛び、草花は今が盛り。ちょうど清明節に合わせたように、雨が舞い散る頃だわ。

(退場)(舞台では『道蔵』を載せた机を片づける介)(老旦) 女道士さんが言わなかったら、今日が清明節だということも忘れるところだったわ。清明にはどの家も墓掃除をし、紙銭を燃やすもの。念奴ちゃん、私はあなたと共に貴妃様のご恩を受けながら、何の報恩もしなかった。そこで、一差しの紙銭、一杯のお茶をさしあげ、遙か長安を望んで哭礼をすれば、どんなにか良いことでしょう。(貼) 永新姐さん、それはそうしなくちゃ。私が貴妃様の位牌を書いて供養致しましょう。(位牌を書いて供える介をする)(共に拝礼して哭する介) 貴妃様、

【**前腔**】思えば、天子の限りない恩寵を受けた貴妃様は、命を落とした恨みをどうして忘れられましよう。天子との

風流事は突然に幕を引いてしまったのです。あなたは どうして、呉を滅ぼした西施でありましょう。また、周が褒姒によって亡んだというのも冤罪です。（貼）おや、庭の牡丹が雨の中に一輪咲いている。牡丹は貴妃様が生前最も愛された花、手折って位牌に供えることにしましょう。（倉）牡丹の名花は見事に咲いているのに、牡丹に比すべき傾国の美人はあの世に帰られた。ここには麦飯やお酒が供えられているが、それを馬嵬の貴妃様のお墓に供えることはできない。（哭して叫ぶ介）貴妃様！ あなた様を思って私は眼はつぶれ、腸は断ち切られ、涙が泉のように溢れて流れ、大声を放って哭くばかりでございます。（ひそかに退場）（末が歩いて登場）

【鎖南枝】江南は南京の道を、偶々花見がてらに歩いていると、花に降る通り雨で、私の衣装も濡れます。私は李亀年、幸いに李暮さんに出会い、その宿に引き留められました。今日は清明節なので、外出してそぞろ歩きをしていたところ、ちょうど清明の風雨に見舞われました。恨めしくも、お参りすべき故郷は雲に覆われてよく見えず、白髪頭を垂れて悲しんでいます。嬉しいことに、道観がここにあるぞ。中に入って、少し雨宿りをしよう。

（中に入る介をする）松の木陰はひっそりとして、鶴の鳴き声がある。まずは暫く石段のあたりをぶらぶらしてみよう。ほら、神座には真人の像が居並び、万巻の経典もあつて、何と荘厳なことよ。（位牌を見て読む介をする）「皇唐の貴妃楊貴妃様の霊位。」（哭く介）おお、楊貴妃様、こんなところに供養をする人がいようとは。（拝する介）

【前腔】【換頭】その人はたちまち落命し、恨みはとこしえに続く。（老旦、貼が舞台の袖から登場）誰が泣いているのだろう？（見て驚く介をする）この人は李（亀年）先生のようにだけど、どうしてここに？（末）恨むべくは警護軍が専横を極め、無理に迫って君王と后妃を離別させたが、まことに天地を揺るがす一大変事であった。隣れにも私李亀年は、（老旦、貼）これは何と、確かに李師匠だ。（末）清明節だというのに、神酒を供えることもできなかったが、この道観を通り過ぎたら貴妃様の位牌を安置していようとは思ひもしなかった。

（老旦と貼が出てきて、末に会う介）李師匠、弟子ども、ご挨拶申し上げます。（末）女道士さん達はどなたです？（氣付

いて驚く介をする。やつ、まさか永新と念奴のお二人なのでは？（老旦、貼）その通りです。（それぞれ涙する介）（末）お二人はいつここへ？（老旦、貼）師匠、お掛け下さい。私達は去年、難を逃れて南に来て、ここで出家しました。師匠はどうしてこちらへ？（末）私も難を逃れて江南へ落ち延びて来ました。先日鷺峯寺で偶然李暮さんに会い、その家にお世話になりましたが、ここで更に二人に会おうとは思いませんでした。（老旦、貼）李暮さんとは？（末）話せば奇怪なことです。当時、私はあなた達と朝元閣で霓裳羽衣曲を練習していたのを、図らずもこの李さんが宮殿の塀の外で盗み聞きしており、鉄笛で新曲の数段をこっそり写し取っていたのです。今日、彼は私にその全曲を伝授することを望み、それでその家に滞在しています。（老旦と貼が悲しむ介）ああ、霓裳羽衣曲はこうして世間に伝わるのに、思わぬことに、その曲を作った人は已にこの世にいなく、曲を演奏した私たちまでも他郷を流浪しているとは、何と心痛むことでしょうか！（それぞれ悲しむ介）（老旦、貼）

【供玉月】【五供養】口にすれば心痛みます。思えば、我らは華清宮で貴妃様に侍り、共に霓裳羽衣曲を演奏しました。貴妃様は細く白い指で天上の秘曲を写し取り、赤く艶やかな唇で新曲を教えて下さいました。【玉交枝】ところが、今や貴妃様の墓には若草が青々と生い茂り、我らは柳絮のように大道をふらふらさまよう始末。【五供養】（合唱）突然の出会いにそれぞれ涙で衣装を濡らし、【月上海棠】白髪の老人と若い旧宮女とが、顔を合わせて人世の興亡を語り合う。

（末）幸いに空も晴れたので、私はおいとまします。（老旦、貼）もうしばらくいらして下さい。師匠にお尋ねしますが、梨園にいた人たちはどうなったのでしょうか？（末）賀（懷智）さんは私と同行しましたが、途中で病没し、黄旛綽は天子に随行し、馬仙期は賊軍に捕まって行方不明、雷海青だけは賊軍を罵倒して殺されました。

【前腔】上皇様を追想すれば、その恩沢は梨園の弟子全てに遍く行き渡っていた。どうしてその大恩に報いることができよう。（泣く介）あの雷さんは、白日のように輝く忠誠心を持っていたが、落日の下で泣く遺老の私は恥ずかし

い限り。(老旦、貼)師匠、秦国夫人や虢国夫人が共に乱兵に殺されたことはご存知でしょう。(末)知っています。貴婦人の運命は傷ましいばかり、今やあの長安の曲江では誰が遊ぶことがあるう?(合唱)突然の出会いにそれぞれ涙で衣装を濡らし、白髪の老人と若い旧宮女とが、顔を合わせて人世の興亡を語り合う。

(老旦、貼)天子様はいつ還御なさるのでしよう?(末)李(暮)さんが以前長安に居られた時の話では、近頃郭(子儀)將軍が長安の秩序を回復し、戦乱も止んだので、やっと江南の故郷に帰れたとのこと。思うに、上皇様も間もなく帰京されるだろう。(老旦、貼)それは有り難いことです。(末)日も暮れ、道も遠いので、わしはこれで失礼しよう。(老旦、貼)貴妃様に紙銭を焚いて、食事でもしながら、もう少しお話ししましょうよ。

(末) 江南に逃れた私は、今や身一つ生き残るのみ、
韓 愈

(老旦、貼) 出家した私達は、鮮やかな霓裳羽衣の衣装を、

女道士の月色の道服に着換えた。
王 建

(末) 人の世は、何度傷ましい事が繰り返されることか、
劉 禹錫

(老旦、貼) あたかも落花の季節に、又も李さんに出会おうとは。
杜 甫

注

- (1) 原文は「夜来風雨催花葬」。唐・孟浩然「春曉」に「夜来風雨声、花落知多少」と。
(2) 原文は「寂寂雲房掩竹扃、春泉漱玉響泠泠」。唐・劉長卿「戲贈干越尼子歌」(『全唐詩』卷一五一)に「却對香炉間誦經、春泉漱玉寒泠泠。雲房寂寂夜鐘後、吳音清切令人聽」と。
(3) 原文は「舞衣施尽余香在、日向花前学誦經」。唐・楊巨源「觀妓人入道」二首其一詩(『全唐詩』卷三三二)に「舞衣施尽余香在、今日花前学誦經」と。

(4) 原文は「提唱」。「提唱」は、禅宗で、師が語録の講義や宗旨の説明時に、その大要を提起して説法すること。提要・提綱とも。ここでは、楊貴妃が白鸚哥に『般若心経』(『多心経』)を朗誦させたことをいう。故事は「楊太真外伝」巻下に見える。

(5) 原文は「是色非空、誰觀法相」。「是色非空」は『般若心経』にいう「色即是空、空即是色」をもじったもの。「色」は眼で見るいろ・かたち。「法相」はこの世に現象する万物一切の本質、道理。塩谷温の国訳漢文大成『長生殿』三六五頁に「色慾に拘はれて、空理を覺らざる意」とあるのに従う。

(6) 原文は「香茗雨前烹」。「雨前」は穀雨前に摘んだ柔らかい若芽で制した茶。「雨前尖」とも。ここは、後の驟雨に掛ける。

(7) 原文は「名花無恙、傾国佳人」。李白の「清平調詞」其三に「名花傾国兩相歡」と。

第四十齣 仙 憶

【南呂引子】【掛真兒】(且が仙人に扮し、老且が仙女に扮して続いて登場) 仙人となった私は、鶴に乗り鸞鳥を従えて仙宮へ帰り来て、天上から空しく人間世界を眺めやる。あの華清宮の端正楼や長生殿のあたり、往事が思い出されて感情がひどく高ぶる。

【浣溪紗】「遙かに広がる雲の中、私のいる閨房は閉められたまま。仙界へ帰ったばかりの私は気もそぞろ、下界を振り返りつつあれこれと思い悩む。ふと、向こうの階段のそばの玉樹の中に、つがいの鸞鳥が棲んでいる影が見え、何度その影を振り払おうとしても妙に心惹かれる。」私は楊玉環、幸いに天帝の玉旨をいただいて仙宮に復帰することができ、以前のように蓬萊山の太真院に住んでいます。とはいえ、玄宗から賜った結婚記念の品だけはずっと身に付けており、また玄宗と交わした七夕の誓いはどうしても背くことができません。その由来を話し出せば、とても長くなります。

【高平過曲】【九回腸】【解三醒】馬鬼の騒乱では、やむなく陛下と突然の生死の別れをしたが、それが二人の愛情に何の関わりがあるう。死と生に分かれても二人の愛情の絆を分断できず、恨みが空しく山のように積もるだけ。あちらの人間界では、陛下が旧情を思つて愁いに閉ざされているでしょうし、こちらの天界では、私靈魂は血の涙を流し続けて、今も乾くことがなく、空しく歎くだけです。【三学士】二人は終生連れ添う比目魚の夫婦となることもなく災難に遭遇し、仲の良い鴛鴦の夫婦の縁も無く、何が仙人なものですか。⁽¹⁾この金の簪と螺鈿の小箱を見れば、二人の愛情はまだ確かにある。どうして永遠の愛の誓いが消えてしまうことがあるものか。【急三鎗】一体いつになったら幸せの青い鳥の使いが来て、二人の情縁を再びつなげ、二人が再会し、二人してその愁いを語り合う日が来るのでしょうか。

(貼が登場)「試みに蓬萊山の山頂から眺めてみれば、雲海が清らかに波立つ上を、鶴が飛んで来る。」私は寒簧です。月宮の嫦娥様の命を承け、太真玉妃様の霓裳羽衣の新曲を受け取りに参りました。もう着いたわ。早速中に入りましょう。(中に入る介)玉妃様、ご機嫌よろしゅう。(旦)仙女はどちら様?(貼が笑う介)玉妃様は私寒簧をまだ覚えておいでですか?(旦が考える介)おお、月宮の仙女様ではありませんか?(貼)その通りです。(旦)どうぞお坐りを。(貼が坐る介)(旦)以前夢の中でお別れして、たちまち数年がたちました。今日遠くから見えたのは、どういう訳でしょう?(貼)玉妃様、お聴きを。

【清商七犯】【簇御林】もと月の広寒宮の秘曲である霓裳羽衣曲を、玉妃様が靈妙な才能で楽譜を詳細に写し取られたのを嫦娥様がうらやまれ、特に私が嫦娥様の命を承けて、【鶯啼序】はるばる蓬萊山まで知音の土を訪ね、当時の楽譜を借覧してこの目で確かめる為に参ったのです。(旦)なるほどそうでしたか。あの日は幸いに夢の中で天上の音楽を聴くことができ、管弦の音楽に写してみました。まだあやふやで、誤りもあるうかと思ひます。【高陽台】もったいなくも月宮の使者に、どうして音曲の残りを調べていただくことがありませんか。当時を思い起こせば、

涙が止めどなく流れます。(涙する介) (貼) おや、玉妃様、どうして涙を流されるのですか? (旦) 【降黄龍】無残にも私は大変な災難に遭遇し、宮中で奏でた音曲は全て損なわれました。【二郎神】管弦の弦も切れ、夫婦の絆も断たれた今、この名曲を再び弾くことはできかねます。仙女様、どうか嫦娥様に申し上げて下さい、私如き下凡の者の旧楽譜は、とてもお召しにかなうものではありませんと。どうかお許しを願います。(貼) 玉妃様、固辞なされませんように、嫦娥様は、あなたが類似稀な聡明さで、【集賢齋】人間界を独占する新曲を作ったことを敬慕されています。今回その曲譜を求めるのが遅かったことを悔いておられますが、どうか嫦娥様の思し召しに背かれませんよう。(旦) 嫦娥様のお求めということであれば、以前私が蓬萊山に帰りました折、偶々霓裳羽衣曲を思い出して書き留めたものがここにございます。(貼) それはすばらしい。(旦) 侍女よ、取って来て下さい。(老旦が返事をして退場し、曲譜を持って登場) これが曲譜です。(旦が受け取る介) 仙女様、曲譜は取って参りましたが、ただやはり書き直した方が良さそうです。(貼) どうしてですか? (旦) ご覧下さい、【黄鶯兒】曲譜の字面は乱れ、曖昧で途切れがち、みな涙の痕が滲んでいます。

(貼) それは一向に構いません。(旦が曲譜を手渡す介) では、嫦娥様へお渡しいただき、夢の中でひそかに書いたものなので、音節に誤りが多く、訂正が必要だとお伝え下さい。(貼) 承知しました。では、これで失礼します。(貼が曲譜を持って退場) (旦) 侍女よ、門を閉めて、私についておいで。(退場) (老旦が返事をする介をし、旦について退場)

(貼) 霓裳羽衣曲の成立から完成に至る経緯を、
王 建

(旦) どうして嫦娥様が仔細に知ることがありますよう。
唐 彦謙

(貼) 今聞けば、玉妃様がしきりにこの曲を悲しまれるのも道理。
劉 禹錫

(旦) 月下に佇む美人(玉妃)は、一体誰を待つのでしょうか。
李 商隱

注

- (1) 原文は「不成比目先遭難、拆鴛鴦説甚仙班」。唐・盧照鄰「長安古意」に「得成比目何辞死、願作鴛鴦不羨仙」と。
(2) 原文は「朱絃已断」。朱絃は赤い絲、夫婦の縁に喩える。唐・李復言『続幽怪録』卷四「定婚店」に「(老人)曰、赤繩子耳。以繫夫妻之足」と。

第四十一齣 見月

【仙呂入 双調過曲】【双玉供】【玉胞肚】(雑が四名の將軍に扮し、二人の侍従が生に乗った馬を引き、丑が随行して登場)(合唱)今上陛下が明皇をお迎えし、ご帰還を促して車列や儀仗が並ぶ。明皇が成都を離れて杜鵑の声は聞かなくなったが、この長安にはまだ庶民の流離の悲哀が残っていることだろう。【五供養】長安の山河は変わりなく、再び皇朝の風光を見ることができて嬉しい限り。(多数の民人が登場し、跪いて明皇を出迎える介)扶風県の民人が明皇陛下をお迎えに上がりました。(生)お迎えご苦労。帰ってよいぞ。(民人が地にぬかずいて「万歳」を叫んで退場)(生が民人と舞台を行く介)【玉胞肚】村の長老が次々にやって来ては、われがちに道を遮り、地にぬかずいて一斉に「万歳」を叫ぶ。

(丑)陛下に申し上げます。日も暮れましたので、どうか御車を鳳儀宮にお駐めなさいますよう。(生が馬から下りる介)兵士達は外で待機するように。(兵)了解しました。(退場)(生が中に入る介)高力士よ、ここから馬嵬までどれくらいの道のりか?(丑)ほんの百里余り(約五十km)でございます。(生)以前に命令を出し、地方官に貴妃の墓を作らせたが、お前は夜を日に継いで先に往き、工事を進捗させ、朕の到着時に改葬ができるようにするのだ。(丑)承知しました。「私は暫くこの鳳儀宮を離れ、先に馬嵬へ参ります。」(退場)(侍従がひそかに退場)(生)「朕はにわかには四川を出発して東方の長安へ帰る道すがら、この鳳儀宮に車を駐めて夕陽に対して思えば、

蒙塵した昨年はここで土地の父老が差し出した麦飯を食したが、そのことを思い出すたびに涙で衣が濡れる。」
朕が蜀へ行幸してから、覚えず一年余りが経った。その間、幸いに長安の秩序が回復し、ここまで帰って来たが、この離宮の寂れた様、夕暮れの侘びしさを見れば、本当に心が痛む。

【攤破金字令】夕暮れ近く、庭には薄霧が立ち込める。物静かな夜、鐘の音が風のさやぎに消えてゆく。この愁いに悩む私を、誰が目にも留めることがある？ これでも十分に愁いに耐え難いのに、まして牆の向こうから名月が出てくればなおさらだ。月光は寂しく人氣のない階段を照らし、ひっそりと青い苔を照らしてゆく。私は一人で歩けば悲哀が一層増し、両頬に流れる涙をしきりにぬぐう。万感の思いは尽きず、全くやるせない。

朕はこの名月に対して、貴妃の冷たいむくろが埋められた侘しい墓を思い出し、益々心が痛む！

【夜雨打梧桐】霜や雪のように白く照らす月光も、貴妃の冷たい墓中までは照らさない。本当に心が痛む。こうして一人で月に向かってしていると、急に昔のことが思い出される。そなたと偶に離れば、片時でも耐え難かったのに、まして今日、そなたと永遠に生死を隔てているのでは尚更だ。（泣く介）貴妃よ、当時は結婚の誓いとしてそなたに金釵と鈿盒を与えたが、まさかそれが殉葬の品になろうとは思ひもしなかった。歡樂の日々はもう来ないが、ただこの金釵と鈿盒はどうしてこの世に留められず、地下に埋められることになったのか？

（歎く介）ああ、貴妃よ、貴妃。そなたの生前の声や顔が昨日のことのように思い出され、どうして忘れられよう！

【攤破金字令】【換頭】彼女が愛くるしく眉を顰めて笑うような風情は二度と来ないなどと言わないで欲しい。少し怒った赤い顔に涙眼を物憂く見上げる姿でさえ、千金出してもどこで購えるものか。たとえ別に美人がいたとしても、それはありふれたものであり、どうして彼女のように意気投合して、思いを分かち合えるだろうか。こう考えてくれば、果然とするばかり。思えば貴妃亡き今、朕一人が生きても死んだに等しい。もし朕の死後貴妃に逢える

のなら、この世に強いて生き残るよりもましではないか。一人で生きても醜い形骸をさらすだけ、残余の人生など死んだも同然だ。ひたすら願わくは、速やかにこの世に離別し、あの世に行つて、貴妃と地中に連理樹を植えたいものだ。

思えばあの年の七夕、貴妃と共に牽牛織女に永遠の誓いを立てたのに、今宵の月光の下、朕一人がここに生き残ろうとは！

【夜雨打梧桐】あの日、長生殿の玉階の下で、二人は頼寄せてささやき交わした。二人の心は一つになり、永遠の情愛を誓ったものだ。ところが誰知ろう、あの夜は二星が並んで二人を照らしていたのが、今夜は月一つだけが出てくるなんて。時世は移ろい、環境は変わり、人事も刷新した。月よ、月、二人が誓いを立てた時、お前も一緒に聞いたはずだし、七夕の鵲橋のほとりには嫦娥様もおられたのに、どうして二人の再会をずると引き延ばされるのですか。かの牽牛織女の証人を催促して、我らの金釵と鈿盒の永遠の誓いを団円させるべきです。

(侍従が登場) 夜も更けました。天子様には宮殿に入つてお休みを。

(生) 銀河がゆらゆらとたゆたい、月はしらじら輝く中、 崔 櫓

万乗の君たる天子は寂しく蜀から還御する。 崔 道融

今や貴妃の芳香や艶姿は夢のように消え失せ、 王 適

その靈魂は杜鵑と共に飛んで行く。 韋 莊

注

(1) 原文は「離南京不聴鵑啼、怕西京尚有鴻哀」。『資治通鑑』卷二二〇、肅宗至德二載の項に「以蜀郡為南京、鳳翔為西

京、西京為中京」とある。ここでは「西京」は東都洛陽に比して述べたものと解し、「長安」と訳する。

第四十二齣 駅備

【越調 過曲】【梨花児】（副浄が駅役人に扮して登場）私は駅役人としてはいい加減で、付け届けを欠いてはいつも罰を受けています。今日御車が到着するとは冗談じゃない、やつ、ミスがあるうものなら殺されてしまふぞ。

私は馬嵬の駅役人、小さい頃からこの役所で働いています。駅務の筆頭になり、馬嵬駅の長に抜擢されました。ここは陸路の要衝で職務は多忙ですが、臨時収入も多いのが嬉しいです。定期の上納分からは幾らか上前をはね、決算報告でも馬の数をごまかします。日々の手当や月々の役所の経費、食費も差し引きます。私がびびるのは上級役人の査察、恐れるのはピンハネした囚人や下級役人です。苦役の免除を金で買う規則を設け、月給を巻き上げては脅しを掛けています。駅務に欠員が出るようだと、いつも大慌てです。今や大仕事が目前に迫っています。太上皇様がこの馬嵬駅に御車を駐められるのです。そこで私は、大急ぎで各種の職人を集め、駅舎の周囲をきれいにしました。更には貴妃墓を改葬し、新しい墳墓を建てるとのこと。これは人夫が貴妃様の玉体をのぞき見るのを避けるために、別に女工四百名を選ぶ必要があります。高力士様は既に到着され、工事を急ぐようにせき立てているとのこと、もし工事が少しでも遅れば、（薄絹の官帽をはじく介）このおつむが飛んで、背丈が一尺短くなることだろうよ。（末が駅役人に扮して登場）（会う介）親方、職人らはすでに揃っております。ご安心を、心配は無用です。（副浄）女工のほうは？（末）現在、四百名の女工が駅門に集合しています。（副浄）すぐ呼び入れよ。（末が呼び入れる介）女工ども、歩け。（貼、浄、雑が村の女に扮し、丑はちよび鬚をつけた女に扮し、それぞれ鍬や鋤を持って登場）私らは地元の村の女、墓の改葬に当たります。（会う介）女工達がご挨拶します。（末）起て、点呼

を取る。(副浄が点呼を取る介) 周おばさん。(浄が応じる) (副浄) 呉ばあさん。(貼が応じる) (副浄) 太めの鄭さん。(雑が応じる) (副浄) 尤ねえさん。(丑が口を覆い、しなだれて応じる介をする) (副浄がしげしげ見る介をする) おや、どうしてこの女は口を覆って答えるのだ? ちよつと怪しいぞ。駅夫、代わりに見てこい。(末が返事をし、丑の手を引つ張り、開けて見る介) 親方、鬚があります。(副浄) お前は男か、女か? (丑) 女ですわ。(副浄) 女の鬚が口に生えるものか。うそを言え。駅夫、やつのズボンをまさぐってみよ! (末が返事をし、丑を調べ、おどける介をする) 親方、この鬚野郎は二世女工ですぜ。(副浄) おお、何ということだ。これは天子様の御用で、いい加減にはできぬ。幸いに俺様が注意深くてよかったが、もし皇帝にこのことが見つければ、あやうくこの首が飛んで、お前の鬚の上に乗つたところだった。打て、打ちすえよ! (丑) 親方の人集めが急で、この村では三百九十九名は集まりましたが、一名だけ足りません。そこで仮に数合わせをしたのです。明日取り換えれば良いのでは。(副浄) やむを得ん、早くこいつを打ちすえて追い出せ。(末が応じ、丑を打ちすえて退場) (副浄が皆を見て笑う介) 今ので俺様は疑念が湧いてきたぞ。お前らも女じゃないのじゃないか。(皆が笑う介) 私達はみな女です。(副浄) 口では信用できぬ。俺様が皆を手でさぐってみて、それで信じることにする。(副浄が皆をまさぐり、皆が逃げ隠れて笑う介をする) (浄) 親方の手が長く伸びて、おかしいこと。(雑) たった今、刷毛に触ったところ、(副浄) 石首魚いしもちの臭いが手についてしまったわい。(貼) 部屋に持つて行って酒の肴にしますか。(おどける介) (老旦が舞台の袖に登場) 「私は貴妃様の錦の足袋を天子に差し上げようとして、ひとまず鍬を手にして女工として働こうとしています。」私は王婆さん、楊貴妃様の錦の足袋を拾ってからというもの、見物人が争って見に来たので、しこたま金儲けしました。今聞けば、上皇陛下が帰られたとのこと、一つは宮中の物を私蔵すれば災いの種になろうし、二つはこの錦の足袋を献上すれば、ご褒美をたんといただけるかも知れません。うまい具合に馬嵬駅で女工を募集しているので、その一名に加わり、改葬が終わったら足袋を献上することにしましょう。ここはもう駅の前。(末が登場し、会う介) その婆さん、何し

に来たのだ？ (老旦) 女工になりに来ました。(末) 待つておれ。(中に入る介) 親方、女工になりたいという婆さんが外に来ております。(副浄) 呼んで来い。(末が出て、老旦を呼び入れ、会わせる介) (副浄) お前が女工になりたいという者か？ (老旦) 左様です。(副浄) 見たところ、お前は年を取りすぎて仕事はできません。だが、ちょうど今一名足りず、急には見つからぬので、お前を頭数に入れよう。お前の名は？ (老旦) 王婆さんといいます。(副浄) よし、よからう。これで周、呉、鄭、王の四姓が揃った。お前達四人は組頭となつて、それぞれ女工九十九人を受け持ち、駅舎内で墓の掘り方を訓練し、陛下のご到着を待つのだ。(衆) 分かりました。(それぞれ見ておどける介をする) (副浄) お前達はそれぞれ鋤・鍬を手に持て、この俺様が一つ自ら指導してやろう。(皆が応じ、各自が鋤・鍬を手にする。副浄が手本を示すしぐさ、皆がまねをする介をする) (副浄)

【亭前柳】 鍬や鋤を手に持ち、墓土を掘るにも掘り方がある。貴妃様の玉体を傷つけることなく、注意深く黄土を払い除けよ。(合唱) みんな練習して、墓掘りに習熟しなければならぬ。これは天子のご下命であり、決して誤りがあつてはならぬ。

(皆) 親方、我らは、

【前腔】 田舎で野良仕事を生業なりわいとしており、泥土いじりには慣れております。注意を払って一斉に力を入れて墓を掘つても、どうして疲れることがありませんよう。(合唱、同前)

(副浄) では、駅の裏手へ行つて、徹夜で掘り起こすのだ。(皆が返事をする介)

貴妃様の尊顔は空しく馬嵬の塵土に覆われ、

高 駢

玄宗との情愛の日々は過ぎゆき、月日が新しく流れる。

鄭 畋

夜明けに貴妃墓のある平原に祭壇を設け、

方 干

上皇の御車が再び来臨するのを共に仰ぎ見る。

僧 広宣

(※) 本稿校正の最中に、岩城秀夫先生訳『長生殿』(平凡社、東洋文庫七三一、二〇〇四年十月)が刊行された。明・湯顯祖『還魂記』、清・孔尚任『桃花扇』を始めとして、数多くの明清戯曲・随筆の翻訳を手がけられ、『中国戯曲演劇研究』『中国古典劇の研究』はもとより、中国文学研究全般に亘って専著を公刊されている斯学の碩学が、醇雅な文体で『長生殿』訳を発表されたことは、日本の中国戯曲研究の水準を示すものであり、研究者の末席に加わる者として誠に喜ばしく、且つ誇らしく思う。今回は時間の関係上、先生のご労作の参照と反映が十分にできなかったが、浅学の拙訳は文体や言い回し等、学界に公開されたこの『長生殿』訳に多くを学ぶ必要がある。